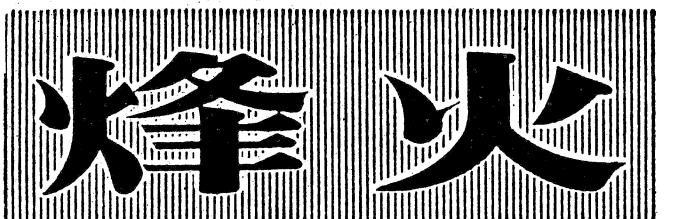


☆帝国主義の侵略反革命、社会帝国主義の武装反革命を粉碎し、世界革命戦争一世界プロ独を組織する世界単一党を国際階級闘争の最前線に組織せよ！

1978年
11月1日
第319号
編集発行人 高木一夫
一部 150円



共産主義者同盟（全国委員会）

■ 大阪戦旗社 大阪市大淀区本庄東2丁目2の31
とみやビル15号 (06) 371-3706
■ 東京 新宿北郵便局 私書箱 2018号
■ 沖縄 那覇東郵便局 私書箱 2016号

侵略反革命戦争への 国民総動員の道

有事立法粉碎

三里塚二期工事阻止？ 沖縄CTS決戦勝利？

全国の同志諸君！たたかう労働者人民諸君！九・十月のたたかいは、有事立法、三里塚、沖縄（CTS）、狹山、「むつ」を頂点的政治攻防環としてたたかひぬかれた。敵日帝国家権力は、しだいにたかまく労働者人民の反抗と反撃を前にして、より一層の強権的姿をむきだにしている。かつてない規模と計画性をもつくりひろげられている有事立法攻撃こそ、その頂点にたつものである。有事立法攻撃とのたたかいは、全労働者人民にたいし、日帝の朝鮮侵略反革命戦争準備のための国家総動員体制の確立をゆるすのか否か、これを八〇年安保体制への敵の布石たらしめるのか否かの選択を、敵としてつきつけているのである。

いまこの時、革命的プロレタリアートはこのたたかいの全過程をとおして、プロレタリアート内部における社会帝国主義、右翼日和見主義との権力問題をめぐる容赦ない闘争を基軸にがっちりとすえ、社会帝国主義者どもによる「有事立法」とのたたかい平和・中立の日本をめざす護憲闘争」なる幻惑のベールで飾られた中間連合政府攻撃の強化とトコトンたたかひぬき、帝国主義足下プロレタリアートの國際主義的任務たる、侵略反革命を内戦へ転化すべく、武装蜂起*・プロレタリア独裁準備の決定的転回点を戦取してゆくのでなければならない。

それは何よりも、世界プロ独・世界党建設への大道と結合してはじめて社会主義への進路をさししめしうるのであり、レーニン主義世界党をたたかいつつてゆく国际党派闘争の革

命的推進をつうじてわれわれは、わが国の階級闘争がもつてたたかいつるべきプロレタリア独裁の内実を、尖銳にしめさなければならぬ。

全国のたたかう労働者人民諸君！

激化する帝国主義の侵略反革命戦争と階級最深部からの革命的政治的決起を組みせよ。七八年後期、われわれは、わが共産主義者同盟（全国委）とともに革命的政治闘争の戦場へ、大胆にみずからを登場させよ。ともにたたかひぬこう。



反対同盟をむかえて二期工区決戦への決意をうぢかためる（10・9関西）

11月 知念同志（75年7・17）
(ひめゆり闘争戦士)

奪還勝利集会へ

世界資本主義の危機の深まりと 国際階級闘争の激化

われわれの生き、かつ闘うこの現代過渡期世界といふ世界史の一時代は、資本主義の最高発展段階としての帝国主義の時代でありながら、その内部から世界プロレタリア独裁への現実的移行の諸条件が成熟をとげてゆくといふ、そのような時代的特色をますます明らかにせずにはおかしい。

戦後ヤルタ・ジュネーブ体制崩壊後の現局面は、いくつかの起伏を伴いながらも、一度失われた均衡が、もはや戦争と恐慌をもつて以外に自らを解決しえない方向へと不可抗的に進行しつつある。それは何よりも、この「失われた均衡」をめぐった帝国主義・社会帝国主義の世界支配再編の強盗的抗争をより尖鋭化させる以外なく、基底的に深まりゆく世界資本主義の危機からの、それは死活的延伸方向にはかならない。

われわれは、すでに烽火三一八号紙上で次のようにのべた。「七月、ボンにおける第四回先進国首脳会議は、国際階級闘争の押し寄せる足音と資本主義の全世界的危機の前に、通貨問題には手をかけぬまことに、『危機打開のための相互協力と役割分担と監視強化』を確認して終つた。だがこれは彼ら帝国主義の強盗的抗争をいささかも緩和するものではありえない」と。

今日における「国際通貨問題」とは、したがつて一方では戦後世界資本主義の根源的矛盾の発現形態の一つであり、それを通じて帝国主義間対立を激成するよりほかないものである。そして他方では、日本に典型的なように、連日の「円高・ドル安」の強宣伝をもつて、自己の危機を認めざるをえないという現実のもとで、「危機を危機として組織する」、すなわち階級闘争の自然発生的憤激を、排外主義の下に沈静一収束せしめんとする、一つの性格を有していることを決して見落としてはならないのである。つまり一言で言えば、今日のいかなる政治上・経済上の諸問題も、この帝国主義の中心的延命方向と切り離しては考えられなくなりつつあるのだということなのである。そして、「帝国主義の中心的延命方向」たる侵略反革命は、第一に東欧などスターリン主義国家をまきこんだソ連社帝の武装反革命、第二に帝国主義間対立と市場再分割のための強盗的抗争、第三に民族解放運動など国際階級闘争の前進、以上の諸点から規定づけられている。

では、次にこのような世界全体をおおいつある帝・社帝の角遂は、いかなる世界戦略の下で自己の世界支配再編を主導的にはから

は?

米帝がかかる帝国主義間対立の下で、依然として帝国主義支配体制の主要な位置を占拏するのは、第一には、現代過渡期世界における新たな反革命たるソ連社会帝国主義との対決を、西独帝・日帝を領導してなしうる經濟的政治的軍事的力量を有していく唯一の帝國主義であること、第二に、ソ連社会帝国主義と結託して民族解放社会主義勢力の闘い、先進帝国主義国における革命的左翼の闘いの前進に示される国際階級闘争に対抗しうる軍事的力量を有していることからである。

米帝の世界戦略は、この様な自己の役割を充分に理解した上で組み立てられている。カーターは、ベトナム敗退と国内人民の分裂の前に「対ソ対決」と「人権外交」をかけて登場した。カーターの世界戦略は、ソ連社帝との対抗を最重要課題に戦略兵器の増強をはじめ、この下で通常兵力の同盟国への肩代りをおこない、ソ連社帝との世界支配再編をめぐる角逐を軸にしてNATO・帝国主義侵略反革命同盟の強化をヨーロッパを「正面戦」にして形成しつつある。アジアにおいては、中国に対する社帝化策動、それと連動した民族解放・社会主義勢力の解体、帝国主義下階級闘争の解体を環にしながら自己の侵略反革命・新植民地主義体制の護持とその戦略的立て直し、強化をはからんとしているのである。他方で、「人権外交」の看板を掲げながら、国内における対ソ排外主義を煽りたて、西欧社帝潮流をゆさぶり、アフリカを始めとする第三世界でのソ連社帝の「民族解放闘争支援」に対抗して自己の支配の確立と資源の略奪をもくろんでいる。

ソ連社帝は、米帝の一元的支配の崩壊の下で、その武装反革命としての軍事力量の増強をはかり、中国の社帝化・第三世界における民族解放闘争への介入と制圧をおしすすめつつ、市場再分割の血塗られた触手を全世界的に拡大せんとしている。今日のソ連社帝のこのような世界支配の確立のたぐらみは、自己の國家力量・国家生産力の増大と波及以外の何物でもない「世界革命」の美名の下で、そしてブルジョア政治・帝国主義の現実的展開への融合以外の何物でもないその「国際路線」によっておしすすめられていることを見ておかなければならぬ。

レー寧主義に対する右翼日和見主義として生み出されたスターリン主義は、戦後ヤルタ・ジュネーブ体制の下で、帝国主義支配体制の補完物に成り下がることによつて社会帝國主義に転化した。彼らは、かつての社会排

外主義者が、ブルジョア民主共和制を社会主義のための神聖にして犯すべからざるものにまつりあげたのと同様に、帝国主義の世界支配体制の一形態にすぎぬ平和共存を、社会主義の全世界的勝利のために必要な絶対的条件にまつりあげた。そしてこのもとでの平和的な経済競争によつて世界革命は実現されると主張する。

だが、彼らの主張する「社会主義」たる全世界どのように進行しているのか。ひるがえつてみれば、国際階級闘争の現段階は、まごうことなく帝・社帝のこのよな世界支配再編に対する激烈な抗防を主軸に展開している。「人権外交」「緊張緩和」を掲げた帝・社帝の侵略反革命、新植民地支配の強化は、ひきつづきアジア・アフリカ・ラテンアメリカにおける民族解放闘争の激化を生み出している。

これまで民族解放闘争を一貫してけん引してきたベトナム共産党・中国共産党の党派闘争の激化に示されるような民族解放・社会主義勢力内部における路線闘争の激化を反映して民族解放勢力もまた米帝・ソ連社帝の介入を許し、一国内においてさまざまな政治的分裂を不可避にしている。米帝・ソ連社帝は、これららの分裂を条件にし分断介入支配して自己の勢力圏を拡大するという新たな性格の攻撃を生み出している。だが、帝国主義の支配はも民族の経済的政治的抑圧は何ら解決されることなく解放を求める被抑圧民族のたたかは、社帝との闘争に不可避に直面せざるをえないのである。

今日の民族解放闘争は、したがつてその当初から帝国主義との闘争のみならず社帝との闘争を要求され国际共産主義運動の路線闘争に逢着せざるをえない。

中国共産党の「三つの世界論」にもとづく「反霸權」路線は、レー寧主義世界党建設の國際党派闘争上の、したがつてまたその総路線上の限界に鋭く規定されて、以下のような根本的弱点を露呈せざるをえない。それは第一に、帝国主義の侵略反革命との対峙下にある民族解放・社会主義勢力の領導という点において、第二に、国内階級闘争においては「一国社會主義論」的傾斜を深め生産力主義へ不斷に屈服していくをえないこと、第三に、社帝の國際共産主義運動に対する反革命制圧の策動を許し、それゆえに現下の帝国主義下階級闘争への指導基軸をますます失いつつあるのである。

帝・社帝の攻撃は、国際階級闘争の一方の翼である帝国主義下における階級闘争にもお

帝国主義の強盗的抗争の深まりの中で「國家一国民の危機」を排外主義的にありたて、社共を「中間連合政府」攻撃のもとへととりこみ、労働者人民の憤激の増大をこのもとに封殺し革命的左翼の全面的解体をねらい、アシズムと戦争によって、この危機を突破し強行せんとする長期的な、しかも不可避の攻防戦に入っているのだ。

日共をもふくめた「ユーロ・コミュニズム」は各国資本主義との国家権力のもとにとりこまれた社会帝国主義である。ブルジョアジーとプロレタリアーの和解をはからんとするカウツキー主義の手口をそつくり踏しゅうする彼らは、発達した資本主義国の生産力とする彼らは、「社会主義のための絶対的条件である」と主張する。全世界の被抑圧民族の搾取と収奪によって成立した帝国主義のブルジョア民族国家の生産力の「平和的発展」を「社会主義」といいくるめることは、革命的プロレタリアートの社会主義への革命的実践に対する公然たる武装反革命であり、帝国主義主要路線承認、資本主義擁護以外の何物でもない。

このよう立場の反革命的性格は、「テロリズム反対」をかけ現体制擁護の先頭に立つイタリア共産党、プロレタリア人民に対する無制限の監視・検閲・さらに銃殺の常態化という白色テロルを行ひ西独社民の姿の中にはつきり暴露されている。

日帝の危機とはこうである。
『日本帝国主義は未曾有の構造的不況に直面した。それは生産の無政府性の増大、市場の狭隘化、市場再分割戦の激化という資本主義の不可避的結果であるとともに、全世界の反帝民族解放闘争のさらなる前進、自国内人民の強奪奪にもとづく反抗と憤激の増大といふ、きわめて今日的な情況によっておいかめられた危機である。帝国主義にとってこの危機からの脱出は、帝国主義間市場再分割戦にかちぬくこと、被抑圧民族への新植民地支配に成功すること以外にはない。この目的のための唯一の手段は侵略反革命戦争と、国内人民の排外主義への組織化にある』(烽火三一八号)

このよう中で、日帝は東南アジア一帯における侵略反革命・新植民地主義支配の確立の策動を、被抑圧民族諸国における反共独裁政権を強力なテコとしておしすすめしており、民族解放・社会主義勢力に対する包囲・封殺の攻撃としておしすすめている。しかし、それはいささかでも米帝との帝国主義間対立を

アジア侵略反革命の急展開

緩和するものではない。むしろ日米帝は、日米安保II侵略反革命同盟の再編、新植民地主義支配の諸権益をめぐっての対立と抗争のただ中にこそある。日米韓反革命体制の自乗化された強化、これこそその実践的帰結である。日帝のアジア侵略反革命は、今日、朝鮮侵略反革命戦争遂行体制の構築として、急展開をとげている。いわゆる「韓国条項」、「韓国安全は日本の安全にとって緊要」(六九年日米共同声明)、「韓半島の平和と安全は東北アジア地域の安保に必要」(七七年)に一貫してあきらかなように、日帝にとって南朝鮮新植民地主義支配の護持は、自己のアジア侵略反革命の強化拡大にとって死命を決する問題である。

では、南朝鮮新植民地主義支配はどのように強化されつつあるだらうか。
日帝ブルジョアジーは、世界経済の不況にもかかわらず、韓国は七七年において10%の経済成長をなし、織維、造船などの分野において日本は追いこまれているなどと排外主義的宣伝をこととしている。だがまさに、

「三〇年代危機へのラセン的回帰」をもつて、現代世界の統一的認識であるとする中核派は、スターリン主義から成長転化した社会帝国主義の革命的プロレタリアートに対する攻撃を何ら理解しえず、したがつて、ますますもつて熾烈一複合化する現代帝国主義の支配の網の目を打破しえず、不斷に自らをその実践的帰結において、急進民主主義革命への悪無限的純化の過程にある。それは、決して帝国主義論の論としての精密化・緻密化によつては突破しうるものではなく、自国帝国主義打倒の闘いを国際党派闘争と固く結合させることにのみ突破の方向があるのだ。そして、このことこそがプロレタリアートが自らの歴史的経験からくみとるべき根本なのである。

先進国における革命的プロレタリアートは、今こそ、二度にわたる革命の流産により延命をとげた帝国主義と、その地盤の上に巨大な成長をとげた社会帝国主義の一切の延命の方途を、こっぱみ尽にうち辟かなければならぬ。今こそ、二度にわたる革命の流産により延命をとげた帝国主義と、その地盤の上に巨大な成長をとげた社会帝国主義の一切の延命の方途を、こっぱみ尽にうち辟かなければならぬ。今こそ、二度にわたる革命の流産により延命をとげた帝国主義と、その地盤の上に巨大な成長をとげた社会帝国主義の一切の延命の方途を、こっぱみ尽にうち辟かなければならぬ。

韓国経済の「成長路線」とは日本独占資本のもとでの、全面的な外資導入による輸出産業の確立であり、買弁資本家の育成であり、これらは何よりも、南朝鮮の労働者人民の飢餓賃金という吸血の上に成立しているのである。これは、韓国における軍需産業の育成をすすめている。「韓国内で、日本の管理する兵器生産を韓国経済第四次五ヶ年計画の骨子とし、その兵器を第三国が買いたいというならば売ればいい」という経団連の河野文彦の発言にあきらかなように、軍需産業により幕大な利潤の導入をもくろむとともに、東南アジアにおける反共独裁政権の「韓国産兵器」による軍備の強化をなさんとしているのである。したがつて、このような情況下でうちつづく南朝鮮人民の朴独裁政権に対する闘いは、その根底においてもつとも激烈な反日帝闘争である。「緊急措置九号」下の戒厳令弾圧にもかかわらず、七月、朴のペテン的「維新大統領選挙」に対し、六・二六予告決起はじめとした英雄的闘争を持続展開している。さらにこの予告決起は、九・一三ソウル大決起、九・一四高麗大決起へと、波及拡大している。決起は朴退陣と、さまざまの民主要求をかかげながら、「一方的な武力統一ではなくし、民衆の意志を民主的に集結させた自發的な平和統一でなければならぬ」と、七・四南北共同声明を画期とする自主的平和的南北統一の闘争を真正面にかかげたことを、みておかなくてはならない。

日米韓反革命体制の強化は、このよう南朝鮮人民の決起に対する全面的軍事制圧をはかるものである。

現在、この日米韓反革命体制の強化は、「九日間戦争計画」に象徴されるように、日米韓共同作戦体制の確立としてすすめられる。第二次大戦以降最大の軍事演習といわれ、この「九日間戦争計画」の実践化といわれた「チーム・スピリット'78」においてもあきらかのように、沖縄からの第三海兵師団の投入は、すでに米八軍・第七艦隊・第五空軍司令部を中心として事実上、一元化され、米軍を主軸に日韓空軍の統合運営と海軍の作戦分担が実施されている。沖縄侵略反革命前線基地の強化と、それと結合した自衛隊の侵略反革命軍隊としての確立は、この共同作戦体制一同軍事行動の実現による日米韓反革命体制強化の要にほかならない。そして、自衛隊の侵略反革命軍隊としての確立は、国連軍としての朝鮮出兵、「難民救助」の名目での「朝鮮半島有事の際の出動」なる海外派兵の策動でもつて、さらに、従来の「専守防衛」から「脅威を与える自衛隊たれ」という金丸発言にしめされるように、核武装化・P3C導入

烽

火

F15導入といった軍備の飛躍的強化の策動をもつておこなわれんとしている。以上、本章においてあきらかにした日帝の

日帝の侵略反革命の急展開は、朝鮮侵略反革命戦争遂行体制の構築を焦点とした中間連合政府攻撃と固く一つのものとして推進されている。中間連合政府攻撃こそ、帝国主義の危機の時代に、帝と社帝の結合によって、プロレタリアート階級闘争の頭上にうちおろされる一大政治攻撃であり、敵のファシズム準備以外の何物にも帰結しない政治攻撃である。今秋期における有事立法攻撃と対決するプロレタリアートの革命的決起の闘争は、かかる攻防の中軸にしつかりと組織されねばならない。

では、有事立法攻撃はどのような過程をつて進行しているのであろうか。

まず、日帝ブルジョアジーは、第一に、「奇襲攻撃をうけた場合第一線の指揮者の判断で超法規的に行動しなければならないだろう」という栗栖発言を引き金に、「奇襲攻撃を受けたらどうするのだ」「有事出動の際、自衛隊員がどうするのだ」とあいついでおりたてた。そして、「有事の可能性とは朝鮮半島のことである」という八月十六日の伊藤防衛局長の発言にいたって、この有事立法攻撃が朝鮮侵略反革命戦争準備にほかならないことが、もはや覆いかくすべくもなくだれの前にもあきらかとなつたのである。

第二に、そしてここにいたって、有事立法の制定の範囲を「奇襲対処」から、有事における国民総動員体制にまで拡大した。さらに「GNP」%に防衛費の国家予算をとどめるのはナンセンスだなどの軍備増強にむけた大々的キャンペーンが、公然たる兵器生産と武器輸出をもくろむブルジョアジーの意を受けて開始されたのが次の事態である。

第三に、十月三日福田は、有事立法制定に関する検討を防衛庁のみでやるのはなく、国防会議で上から統一的にすめていくことを決定するにいたつたのである。かかる経緯のうえに、より具体的に有事立法制定のねらいをみていくならば、おおきく次の二点においてとらえることができるであろう。

一つには、「奇襲対処」に名を借りた「交戦規則」確立の策動である。だが、これの意味するところは「防衛出動命令」の前の法的不備などではなく現場の第一線の自衛官の判断で、武力の行使をなさんとするものである。総じて戦争挑発、参戦のヘグモニーを自衛隊にゆだねることを要求し、これを突破口にし

侵略反革命の根本的性格、その中軸をなす朝鮮侵略反革命戦争準備の攻撃の頂点にたつものこそ、有事立法攻撃なのである。

戦争とファシズムへの動員

全野党共闘に労働者人民の憤激を収めさせんとするまつたくペテン的なものである。総評内部においても日帝ブルジョアジーの意をうけて「兵器輸出」「兵器生産」を声高にさけびたてる、造船・重機などの民間大単産、JC・同盟系労組幹部との統一を陰然とおしすすめる、電通右派幹部のごとき産業報国会化攻撃の尖兵が、生みだされている。

また、日共は、米帝主導による朝鮮戦争の危機を叫びたてる。そのうえで日帝の有事立法攻撃を「対米従属下における軍国主義の全面復活、軍事ファシズムへと導びくもの」ととらえる。そして、安保を破棄し、「平和・中立の日本」をつくる民主連合政府のための護憲闘争として闘うと主張する。この日共の主張の第一の反動性は、日帝の侵略反革命を、

て、憲法改悪・防衛二法の改訂をめざすものである。二つには、有事に際しての国民総動員体制の構築、戒厳令体制の確立の策動である。

八月十七日竹岡防衛官房長は、八項目の検討項目をあきらかにした。具体的には、(1)自衛隊の行動に関する例外規定、(2)防衛出動命令前の準備段階での法令整備、(3)府内事務の簡素化、(4)一般市民の避難誘導、(5)自衛隊のもとでの行政官庁の統制、(6)補慮に関する扱い、(7)米軍との協力のための法的整備、(8)自衛隊員への特別給与・手当などの特別措置、についてである。これらの項目をみるとまでもなく、これは「戒厳令」制定以外の何物でもない。日帝ブルジョアジーは第二次大戦における戦事立法を基礎にした三矢研究を参考にして、この有事立法研究をすすめることを公言している。かかる「戒厳令」そのものは、その一部として成田治安法・大地震特別法として野党をまきこんで立法化されており、「弁護人抜き裁判特例法」も有事の軍事裁判として無縁のものではありえない。

日帝の有事立法攻撃は、中間連合政府攻撃のもとで、社帝・右翼日和見主義をまきこんで進行していく。日帝は「憲法改正」を排除する戦事立法を基礎にした三矢研究を参考にして、この有事立法研究をすすめることを公言している。かかる「戒厳令」そのものは、その一部として成田治安法・大地震特別法として野党をまきこんで立法化されており、「弁護人抜き裁判特例法」も有事の軍事裁判として無縁のものではありえない。

日帝の有事立法攻撃は、中間連合政府攻撃のもとで、社帝・右翼日和見主義をまきこんで進行していく。日帝は「憲法改正」を排除する戦事立法を基礎にした三矢研究を参考にして、この有事立法研究をすすめることを公言している。かかる「戒厳令」そのものは、その一部として成田治安法・大地震特別法として野党をまきこんで立法化されており、「弁護人抜き裁判特例法」も有事の軍事裁判として無縁のものではありえない。

右翼日和見主義諸派は、社共の労働運動の反革命制圧のもとで、労働者人民の革命的政治的決起の内部からこれを解体し、社共への合流を画策する。革マルは、社共に反発しながら「朝鮮戦争の危機など存在しない」という。あるいは、「ソ連の南侵の脅威だ」というブルジョアジーの対ソ排外主義に、全面合流する立場から、「有事立法粉碎を、自衛隊の帝国主義軍隊化反対、アジア核軍事体制反対の反戦闘争として闘う」と主張している。このような主張は、自国帝国主義打倒にむけた、労働者人民の革命的政治的決起を白色テロルをもつて社共のもとに封じこめるために解体、糾合せんとする点である。

社会党は、「第三の安保闘争」として、この有事立法に対する闘争をうちあげている。

「反動化・ファシズム化の象徴としての有事立法」とこれをとらえ、「國論を二分する護憲闘争」として闘うとアドバルーンをあげている。だが彼らの「第三の安保闘争」の内実たるや公然と有事立法賛成を表明する民社党、公明党をまきこんだ、国民連合政府のための

義をまきこんだ攻撃として準備されることを無視し、帝国主義との闘争を社会帝国主義との闘争に結びつけて闘うことができず、結局は、帝国主義の強権的な政策に対する急進民

主主義的な反対に、とどまるものである。われわれは、これら「左」右の日和見主義と対決し、有事立法粉碎闘争を革命的に牽引せねばならない。

ぬかなければならぬ。

有事立法攻撃は、社帝・右翼日和見主義をプロレタリアート内部における帝国主義の忠実な手先としてかけられた攻撃である。社帝

・右翼日和見主義はこの攻撃が侵略反革命にむけた国民統合の環として天皇制（イデオロギー）をガッチャリする攻撃を激化させていく。

今秋期における我々の任務は鮮明である。急展開する日帝の朝鮮侵略反革命と対決し、国際主義につらぬかれた蜂起→プロ独の大道をさしめすこと。この闘争を通じて、社帝

・右翼日和見主義の帝国主義主要路線承認、資本主義擁護の中間連合政府攻撃をうちくだき、生まれいでんとする「蜂起とソビエトの萌芽」を全国一斉武装蜂起にてる序幕戦とするために、革命的政治闘争の大胆な組織化が実現されなければならない。同時に、この革命的政

治闘争は、社帝・右翼日和見主義との激しい党派闘争として展開されなければならない。この闘争を通じて我々は、革命党と固く結合した「革命の伝導路」を階級深部に構築し闘ひぬかなければならない。我々がかかるべき、革命的政治闘争の基軸は、以下の点である。

第一に、日帝の朝鮮侵略反革命遂行の急展

開と対決し、八〇年安保闘争の巨大な突破口をきりひらく、安保・沖縄・日韓闘争の大前進を闘いとらなければならない。

現在、日米帝の朝鮮侵略反革命戦争遂行にむけた日米共同作戦体制の強化は、自衛隊の海外派兵・核武装化の策動をテコにして急ピッチで進行している。この攻撃は現在、日米防衛協力小委員会などを通じて米軍・自衛隊・韓国軍の共同軍事行動にむけた作戦具具体化としておしすすめられている。これは単に共同軍事行動における作戦立案のみならず、情報活動・後方支援体制などの国家総動員体制構築にまでおよんでいるのだ。

このもとで朝鮮侵略反革命戦争にむけた沖

共産主義への 長征に出陣せよ

さつをここに送る。

闘い続ける深い決意を新たに、全に押し出されている。

あの七五年、加納一派完全打倒プロレタリアの前に報告する。すでに長期にわたる激烈な彼我の闘いから三年余、日帝国家権力の組織破壊法→「殺人未遂」デッ

革命が急展開をとげ、朝鮮侵略反

チ上げをうちくだいて、勝利的に革命戦争遂行体制の構築に対する歩と結びつけて革命を準備するこ

とに三同志とわが党の、新たな決意に燃えた戦闘宣言を送りとどける。

今村 正

獄中同志奪還す！復帰線宣言

全国の同志友人・支持者のみなさん。九月二〇日、われわれは七五年十一九加納一派完全打倒闘争三戦士の奪還をかちとった。敵権力の党組織破壊・獄中戦士抹殺の野望は粉砕された。われわれは三年におよぶ獄中・獄外をつらぬいた党建設を

圧倒的に前進させることによって、この勝利を握りしめた。ここに三同志とわが党の、新たな決意に燃えた戦闘宣言を送りとどける。

有事立法粉碎し

有事立法粉碎の最先頭へ

☆☆

二期工区決戦はすでにはじまつた。強行開港を既成事実化し、関連事業をもつて条件派を育成し、反対同盟と闘う農民の外堀を埋め、分断・懷柔・破壊をねらう敵の攻撃と対決せよ。二期工区決戦の勝利にむけ、三里塚現地を起点にし、飛行阻止・空港完全粉碎・二期工事実力阻止の戦列をうちかため、日本階級闘争の革命的飛躍を闘いとらなければならぬ。

全国の同志諸君！たたかう労働者人民諸君！このような闘いの前進は、わが革命党・中央集権非合法党建設の前進にかかる。敵権力のますます暴力化し激化する組織破防法攻撃から党組織と党事業、すべての先進的闘いを防衛し、党の非合法武装をおしすすめ、この闘いの圧倒的前進をもつて、秋期闘争の勝利めさせ。ともに最前線へ！

第三に、東京高裁→四谷の再審早期却下策

動を粉碎し、石川氏をなんとしても奪還す

る闘いである。部落解放闘争のブルジョア改

良主義への歪曲と闘い、再審闘争の勝利にむけ狭山闘争を総力をもつて闘いぬかなければならぬ。

第四に、侵略反革命軍事空港粉碎・三里塚闘争を武装蜂起の序幕とせよ！のスローガンをかかげて三里塚闘争を断固闘いぬかなければならぬ。

第五に、侵略反革命軍事空港粉碎・三里塚闘争を武装蜂起の序幕とせよ！のスローガンをかかげて三里塚闘争を断固闘いぬかなければならぬ。

第六に、侵略反革命軍事空港粉碎・三里塚闘争を武装蜂起の序幕とせよ！のスローガンをかかげて三里塚闘争を断固闘いぬかなければならぬ。

第七に、侵略反革命軍事空港粉碎・三里塚闘争を武装蜂起の序幕とせよ！のスローガンをかかげて三里塚闘争を断固闘いぬかなければならぬ。

第八に、侵略反革命軍事空港粉碎・三里塚闘争を武装蜂起の序幕とせよ！のスローガンをかかげて三里塚闘争を断固闘いぬかなければならぬ。

第九に、侵略反革命軍事空港粉碎・三里塚闘争を武装蜂起の序幕とせよ！のスローガンをかかげて三里塚闘争を断固闘いぬかなければならぬ。

第十に、侵略反革命軍事空港粉碎・三里塚闘争を武装蜂起の序幕とせよ！のスローガンをかかげて三里塚闘争を断固闘いぬかなければならぬ。

第十一に、侵略反革命軍事空港粉碎・三里塚闘争を武装蜂起の序幕とせよ！のスローガンをかかげて三里塚闘争を断固闘いぬかなければならぬ。

第十二に、侵略反革命軍事空港粉碎・三里塚闘争を武装蜂起の序幕とせよ！のスローガンをかかげて三里塚闘争を断固闘いぬかなければならぬ。

第十三に、侵略反革命軍事空港粉碎・三里塚闘争を武装蜂起の序幕とせよ！のスローガンをかかげて三里塚闘争を断固闘いぬかなければならぬ。

第十四に、侵略反革命軍事空港粉碎・三里塚闘争を武装蜂起の序幕とせよ！のスローガンをかかげて三里塚闘争を断固闘いぬかなければならぬ。

第十五に、侵略反革命軍事空港粉碎・三里塚闘争を武装蜂起の序幕とせよ！のスローガンをかかげて三里塚闘争を断固闘いぬかなければならぬ。

第十六に、侵略反革命軍事空港粉碎・三里塚闘争を武装蜂起の序幕とせよ！のスローガンをかかげて三里塚闘争を断固闘いぬかなければならぬ。

第十七に、侵略反革命軍事空港粉碎・三里塚闘争を武装蜂起の序幕とせよ！のスローガンをかかげて三里塚闘争を断固闘いぬかなければならぬ。

第十八に、侵略反革命軍事空港粉碎・三里塚闘争を武装蜂起の序幕とせよ！のスローガンをかかげて三里塚闘争を断固闘いぬかなければならぬ。

第十九に、侵略反革命軍事空港粉碎・三里塚闘争を武装蜂起の序幕とせよ！のスローガンをかかげて三里塚闘争を断固闘いぬかなければならぬ。

第二十に、侵略反革命軍事空港粉碎・三里塚闘争を武装蜂起の序幕とせよ！のスローガンをかかげて三里塚闘争を断固闘いぬかなければならぬ。

第二十一に、侵略反革命軍事空港粉碎・三里塚闘争を武装蜂起の序幕とせよ！のスローガンをかかげて三里塚闘争を断固闘いぬかなければならぬ。

第二十二に、侵略反革命軍事空港粉碎・三里塚闘争を武装蜂起の序幕とせよ！のスローガンをかかげて三里塚闘争を断固闘いぬかなければならぬ。

第二十三に、侵略反革命軍事空港粉碎・三里塚闘争を武装蜂起の序幕とせよ！のスローガンをかかげて三里塚闘争を断固闘いぬかなければならぬ。

第二十四に、侵略反革命軍事空港粉碎・三里塚闘争を武装蜂起の序幕とせよ！のスローガンをかかげて三里塚闘争を断固闘いぬかなければならぬ。

第二十五に、侵略反革命軍事空港粉碎・三里塚闘争を武装蜂起の序幕とせよ！のスローガンをかかげて三里塚闘争を断固闘いぬかなければならぬ。

第二十六に、侵略反革命軍事空港粉碎・三里塚闘争を武装蜂起の序幕とせよ！のスローガンをかかげて三里塚闘争を断固闘いぬかなければならぬ。

第二十七に、侵略反革命軍事空港粉碎・三里塚闘争を武装蜂起の序幕とせよ！のスローガンをかかげて三里塚闘争を断固闘いぬかなければならぬ。

第二十八に、侵略反革命軍事空港粉碎・三里塚闘争を武装蜂起の序幕とせよ！のスローガンをかかげて三里塚闘争を断固闘いぬかなければならぬ。

第二十九に、侵略反革命軍事空港粉碎・三里塚闘争を武装蜂起の序幕とせよ！のスローガンをかかげて三里塚闘争を断固闘いぬかなければならぬ。

第三十に、侵略反革命軍事空港粉碎・三里塚闘争を武装蜂起の序幕とせよ！のスローガンをかかげて三里塚闘争を断固闘いぬかなければならぬ。

第三十一に、侵略反革命軍事空港粉碎・三里塚闘争を武装蜂起の序幕とせよ！のスローガンをかかげて三里塚闘争を断固闘いぬかなければならぬ。

第三十二に、侵略反革命軍事空港粉碎・三里塚闘争を武装蜂起の序幕とせよ！のスローガンをかかげて三里塚闘争を断固闘いぬかなければならぬ。

第三十三に、侵略反革命軍事空港粉碎・三里塚闘争を武装蜂起の序幕とせよ！のスローガンをかかげて三里塚闘争を断固闘いぬかなければならぬ。

第三十四に、侵略反革命軍事空港粉碎・三里塚闘争を武装蜂起の序幕とせよ！のスローガンをかかげて三里塚闘争を断固闘いぬかなければならぬ。

第三十五に、侵略反革命軍事空港粉碎・三里塚闘争を武装蜂起の序幕とせよ！のスローガンをかかげて三里塚闘争を断固闘いぬかなければならぬ。

第三十六に、侵略反革命軍事空港粉碎・三里塚闘争を武装蜂起の序幕とせよ！のスローガンをかかげて三里塚闘争を断固闘いぬかなければならぬ。

第三十七に、侵略反革命軍事空港粉碎・三里塚闘争を武装蜂起の序幕とせよ！のスローガンをかかげて三里塚闘争を断固闘いぬかなければならぬ。

第三十八に、侵略反革命軍事空港粉碎・三里塚闘争を武装蜂起の序幕とせよ！のスローガンをかかげて三里塚闘争を断固闘いぬかなければならぬ。

第三十九に、侵略反革命軍事空港粉碎・三里塚闘争を武装蜂起の序幕とせよ！のスローガンをかかげて三里塚闘争を断固闘いぬかなければならぬ。

第四十に、侵略反革命軍事空港粉碎・三里塚闘争を武装蜂起の序幕とせよ！のスローガンをかかげて三里塚闘争を断固闘いぬかなければならぬ。

第四十一に、侵略反革命軍事空港粉碎・三里塚闘争を武装蜂起の序幕とせよ！のスローガンをかかげて三里塚闘争を断固闘いぬかなければならぬ。

第四十二に、侵略反革命軍事空港粉碎・三里塚闘争を武装蜂起の序幕とせよ！のスローガンをかかげて三里塚闘争を断固闘いぬかなければならぬ。

第四十三に、侵略反革命軍事空港粉碎・三里塚闘争を武装蜂起の序幕とせよ！のスローガンをかかげて三里塚闘争を断固闘いぬかなければならぬ。

第四十四に、侵略反革命軍事空港粉碎・三里塚闘争を武装蜂起の序幕とせよ！のスローガンをかかげて三里塚闘争を断固闘いぬかなければならぬ。

第四十五に、侵略反革命軍事空港粉碎・三里塚闘争を武装蜂起の序幕とせよ！のスローガンをかかげて三里塚闘争を断固闘いぬかなければならぬ。

第四十六に、侵略反革命軍事空港粉碎・三里塚闘争を武装蜂起の序幕とせよ！のスローガンをかかげて三里塚闘争を断固闘いぬかなければならぬ。

第四十七に、侵略反革命軍事空港粉碎・三里塚闘争を武装蜂起の序幕とせよ！のスローガンをかかげて三里塚闘争を断固闘いぬかなければならぬ。

第四十八に、侵略反革命軍事空港粉碎・三里塚闘争を武装蜂起の序幕とせよ！のスローガンをかかげて三里塚闘争を断固闘いぬかなければならぬ。

第四十九に、侵略反革命軍事空港粉碎・三里塚闘争を武装蜂起の序幕とせよ！のスローガンをかかげて三里塚闘争を断固闘いぬかなければならぬ。

第五十に、侵略反革命軍事空港粉碎・三里塚闘争を武装蜂起の序幕とせよ！のスローガンをかかげて三里塚闘争を断固闘いぬかなければならぬ。

第五十一に、侵略反革命軍事空港粉碎・三里塚闘争を武装蜂起の序幕とせよ！のスローガンをかかげて三里塚闘争を断固闘いぬかなければならぬ。

第五十二に、侵略反革命軍事空港粉碎・三里塚闘争を武装蜂起の序幕とせよ！のスローガンをかかげて三里塚闘争を断固闘いぬかなければならぬ。

第五十三に、侵略反革命軍事空港粉碎・三里塚闘争を武装蜂起の序幕とせよ！のスローガンをかかげて三里塚闘争を断固闘いぬかなければならぬ。

第五十四に、侵略反革命軍事空港粉碎・三里塚闘争を武装蜂起の序幕とせよ！のスローガンをかかげて三里塚闘争を断固闘いぬかなければならぬ。

第五十五に、侵略反革命軍事空港粉碎・三里塚闘争を武装蜂起の序幕とせよ！のスローガンをかかげて三里塚闘争を断固闘いぬかなければならぬ。

第五十六に、侵略反革命軍事空港粉碎・三里塚闘争を武装蜂起の序幕とせよ！のスローガンをかかげて三里塚闘争を断固闘いぬかなければならぬ。

第五十七に、侵略反革命軍事空港粉碎・三里塚闘争を武装蜂起の序幕とせよ！のスローガンをかかげて三里塚闘争を断固闘いぬかなければならぬ。

第五十八に、侵略反革命軍事空港粉碎・三里塚闘争を武装蜂起の序幕とせよ！のスローガンをかかげて三里塚闘争を断固闘いぬかなければならぬ。

第五十九に、侵略反革命軍事空港粉碎・三里塚闘争を武装蜂起の序幕とせよ！のスローガンをかかげて三里塚闘争を断固闘いぬかなければならぬ。

第六十に、侵略反革命軍事空港粉碎・三里塚闘争を武装蜂起の序幕とせよ！のスローガンをかかげて三里塚闘争を断固闘いぬかなければならぬ。

第六十一に、侵略反革命軍事空港粉碎・三里塚闘争を武装蜂起の序幕とせよ！のスローガンをかかげて三里塚闘争を断固闘いぬかなければならぬ。

第六十二に、侵略反革命軍事空港粉碎・三里塚闘争を武装蜂起の序幕とせよ！のスローガンをかかげて三里塚闘争を断固闘いぬかなければならぬ。

第六十三に、侵略反革命軍事空港粉碎・三里塚闘争を武装蜂起の序幕とせよ！のスローガンをかかげて三里塚闘争を断固闘いぬかなければならぬ。

第六十四に、侵略反革命軍事空港粉碎・三里塚闘争を武装蜂起の序幕とせよ！のスローガンをかかげて三里塚闘争を断固闘いぬかなければならぬ。

第六十五に、侵略反革命軍事空港粉碎・三里塚闘争を武装蜂起の序幕とせよ！のスローガンをかかげて三里塚闘争を断固闘いぬかなければならぬ。

第六十六に、侵略反革命軍事空港粉碎・三里塚闘争を武装蜂起の序幕とせよ！のスローガンをかかげて三里塚闘争を断固闘いぬかなければならぬ。

第六十七に、侵略反革命軍事空港粉碎・三里塚闘争を武装蜂起の序幕とせよ！のスローガンをかかげて三里塚闘争を断固闘いぬかなければならぬ。

第六十八に、侵略反革命軍事空港粉碎・三里塚闘争を武装蜂起の序幕とせよ！のスローガンをかかげて三里塚闘争を断固闘いぬかなければならぬ。

第六十九に、侵略反革命軍事空港粉碎・三里塚闘争を武装蜂起の序幕とせよ！のスローガンをかかげて三里塚闘争を断固闘いぬかなければならぬ。

第七十に、侵略反革命軍事空港粉碎・三里塚闘争を武装蜂起の序幕とせよ！のスローガンをかかげて三里塚闘争を断固闘いぬかなければならぬ。

第七十一に、侵略反革命軍事空港粉碎・三里塚闘争を武装蜂起の序幕とせよ！のスローガンをかかげて三里塚闘争を断固闘いぬかなければならぬ。

工区決戦へ



9・17現地闘争の先頭にたつ反帝戦線▲



◆反対同盟との団結かためる(10・7)

「中間連合政府」攻撃の屈服から、鉄のレーニン主義党を分岐させ、プロレタリアートの武装蜂起へと躍進する。一方で、プロレタリアートは、一切の戦争をこの地上から根絶させるためにこそ、侵略反革命を内戦へと転化し、プロレタリア独裁の下でのブルジョアジーの収奪—追討という、未曾有に激しさを加えた階級闘争へとすくべての被抑圧人民を率い、共産主義の実現への長途の戦闘に出陣してゆかねばならないのだ。

だからこそ、労働運動内部で社帝・右翼日和見主義との権力問題をめぐる党派闘争を容赦なくおこなって、革命的プロレタリアートを建設してゆくのである。

最後に、三年余、獄中生活をともにした幾多の階級戦士たちに心からの友情を伝えたいと思う。必ず健康を保持されて、長期投獄攻撃にかちぬかれんことを切に願うの勝利万才！

獄中一獄外をつらぬく革命的プロレタリアートの戦闘的団結万才！

現代共産主義者が、この歴史的時期になすべき根幹がある。ではそれはどのようにしてか？

一切の情熱を 党建設の事業へ

城戸十三首

同志、友人諸君。

をもつて、この階級攻防に結着をつけようとする。革命的プロレタリアートは、一切の戦争をこの地上から根絶させるためにこそ、侵略反革命を内戦へと転化し、プロレタリア独裁の下でのブルジョアジーの収奪―追討という、未曾有

七五年、共産同全国委員会党建設路線をめぐる党内分派闘争は、政治商人永井一味の脱走、カウツキー主義者右翼日和見主義加納一派の党破壊策動のなかで、前衛党＝中央集権非合法党建設にとつて妥協を許さない重要な闘いであつた。結果は、彼らのなれの果てである今日の姿を見るだけで充分だらう。永井一味（うねぼり屋、意

の同志友人たちの心暖まる激励と支援に対し、深く感謝するとともに、今後は獄中での教訓体験を生かし、一切の情熱をそいで党建設事業——革命闘争に専念する決意です。

ち共産同全国委の党内一分派一党派闘争の結着、中央集権非合法党建設、七五年十・九加納一派打倒闘争の歴史的正当性を実証していきます。新しいものは発展し古いものは滅亡するのです。現在、日帝は、朝鮮－アジア侵略反革命戦争－ファシズムの準備と「中間連合攻守」攻撃をかけてきて

べての被抑圧人民を率へ、共産主義の実現への長途の戦闘に出陣しゆかねばならないのだ。

い、ともにともに闘おう。

一中間連合政府」の構成をなす「一連の政
体となつて「中間連合政府」（ブルジ
ヨア独裁）のもと、プロレタリア人民を
います。社帝と右翼日和見主義は、

三〇一號路線 党建設とともに

南渡
正男

最後に、三年余、獄中生活をともにした幾多の階級戦士たちに心からの友情を伝えたいと思う。必ず健康を保持されて、長期投獄攻撃にかちぬかれんことを切に願う。共産主義者同盟（全国委員会）の勝利万才！

となり消え去つたのである。加納一派はどうであろうか。七六年三月、赤軍派から脱走分子（大久保）と野合して「红旗派」を作り、七七年三月「红旗派」分裂、本年十月には「红旗派解散宣言」を公けにした。

同志、友人諸君。

わが同盟全国委は、これらとの熾烈な闘争に勝利した。この三年間の苦闘は、党の骨となり肉となつて結実したのである。七五年十九闘争の持つ意義は多大でありかつ偉大な闘いであつた。我々の

すべての同志友人、烽火読者のみなさん。私たち三名は、九月二十・九加納一派打倒闘争から三十年。私たちは獄外の共産同全国委党内一分派一党派闘争の結着—三〇一號路線党建設と固く結合し公判闘争では、日帝権力一加納一派一休となつた殺人未遂デッチ上げを粉碎して早期収還をかちとりました。獄中でも党を建設し、獄中プロレタリア人民を組織化し、政治闘争一ブルジョア監獄支配とのたをかいをおこなつて一定の成果と経験

の自然発生の運動を、帝・社帝・打倒、右翼日和見主義打倒！蜂起一プロ独へ向けた革命的政治闘争に転化・發展させねばなりません。そのために、革年、命的プロレタリアートは、プロレタリアートの前衛・労働者人民の指導性・蜂起一プロ独の司令部たる中央集権非合法党を建設し、プロレタリア人民大衆を獲得し、党の革命的水準に高めねばなりません。このたたかいを私は以降、獄外で継続する事を決意表明します。すべての同志友人・烽火読者のみなさん！さまざま激励と支援ありがとうございました。最後まであなたたちとともに進まん！！

党建設は、確実に着実に一步一步

験を蓄積しました。

前進している。どんなに苦しくて
も、どんなことがあっても、我々
の重圧の前に、また、内部の日和見
他方、私たちの党建設一党派闘争

全力で二期



第二次百日間闘争を宣言（9・17）▲

▼たいまつデモで飛行を阻止（9・16）

単一の蜂起・プロ独にむけ沖縄解放闘争の新たな発展をきりひらけ？

七二年沖縄「返還」以降六年をへ、日米帝の朝鮮侵略反革命戦争準備を軍事的に支える沖縄の位置は飛躍的に強化されている。

進行する日米帝の沖縄基地強化

その第一の軸は、朝鮮侵略反革命戦争にむけた直接出撃拠点化にある。「沖縄からのB52の出撃によって、朝鮮半島において敵を九日間でせん滅する」（ホーリングワース）という帝国主義の野望は、本年十月一日付けでの在沖米陸軍の廃止と海兵隊・空軍への再編統合に示されるように、出撃拠点にふさわしい沖縄基地機能の集中と機動性の増強として進行している。

第二の軸は、日帝の位置と役割の増大を基礎にした日米安保同盟の再編と、それに結合した日米共同作戦体制の要としての強化である。今日、作戦・情報・後方支援の三部会を有するまでに成長した日米防衛協力小委員会は、「第二次朝鮮戦争」を想定した全面的再編の過程に突入した。今春の史上最大級の日米韓合同軍事演習「チームスピリット'78」は、そのような再編の要に沖縄基地が存在することを鮮明にした。

第三に、日帝は七二年自衛隊沖縄派兵を基礎に、「沖縄での訓練については米軍演習場の共同使用が好ましい」（十月六日陸上幕僚

長永野）とのべ、米軍駐留費用の分担増額を買って出るなど、日米安保の再編を積極的に推進している。それとどまらず、日帝は、南朝鮮新植民地支配の強化を軸に、市場・資源・原材料の強奪に向けた東アジア全域の反革命的制圧を沖縄基地を軸にもくろんでいる。航空自衛隊恩納基地のミサイル訓練（十月二日～五日）、航空自衛隊那覇基地の三千五百人を参加させた要撃訓練（十月二日～七日）、海上自衛隊の「タンカー護衛」をかかげた船団護衛訓練（十月十一日～二三日）など、自衛隊の軍事演習はかつてない規模と激しさに達しており、軍事燃料基地（CTS）の沖縄への集中とあわせて、自衛隊海外派兵の野望を急速に現実化している。

この沖縄侵略反革命前線基地強化をとりまく国際階級闘争の激動は、新たな時代局面を迎えている。

国際共産主義運動の大分裂を背景に、七五年ベトナム完全解放とその朝鮮半島への波及を頂点にして戦後ヤルタ・ジユネーブ体制を最後的崩壊にたたきこんだ民族解放・社会主义勢力は、ベトナム・中国の対立と論争に示されるように、一国で樹立されたプロ独立政府権力を世界革命・世界プロ独立樹立へと前進させるという課題に突き進むことを通じて激しい政治的分岐を生み出している。

この新たな時代局面は、全世界の革命的プロレタリアートの眼前に、世界党・世界プロ独立をめぐるレーニン主義の現代的継承と帝國

主義心臓部革命闘争の歴史的敗北の克服を突きつけている。我々はこの課題を日帝足下における中央集権非合法党建設と武装蜂起一プロ独の実現にむけた闘いの中に主体的にひき上げ、世界革命・世界プロ独の実現という今日における国際主義の歴史的任務のもとにすべてのプロレタリアート人民を領導しなければならない。

この国際主義的任務は帝国主義の攻撃といふに對決することによって実現されるのか。先進帝国主義は全世界的規模でファシズムの準備期・中間連合政府攻撃の全面化へと突入した。「帝国主義主要路線擁護、資本主義の救済」をかかげた社帝の帝国主義・ブルジョアジーとの歴史的大妥協をもって成立した中間連合政府攻撃は、革命党建設への破壊攻撃を基礎に、人民の憤激を「資本主義の健全な発展、ブルジョア民主主義の擁護」へとひきずりこみ、ファシズムへの歴史的過渡期としてあることを鮮明にした。

日帝にあってもこの攻撃は急ピッチである。昨年五・六岩山大鉄塔破壊反革命非合法攻撃を突破口に、今春においては、「成田治安立法」「弁護人抜き裁判法」「地震対策特別法」と、戦後の統治形態をファシズムにむけて転換してゆくという攻撃が強化されている。そして、今秋全面化した有事立法攻撃は、日米安保の再編と結合した「海外派兵」をなしうる自衛隊の確立・強化に向けた直接的攻撃であるとともに、朝鮮侵略反革命戦争への人民の暴力的動員を焦点にしたファシズムの一、

挙的発動の準備としてあることを鮮明にしている。我々は今秋期、有事立法攻撃を焦点にした階級的激動の背景に、「中間連合政府を歴史的過渡としたファシズムの準備か、蜂起の準備か」という政府権力問題をめぐる本格的攻防の開始をしつかりととらえ、プロレタリア人民を今日の国際主義の根本的任务の獲得へと領導しなければならない。

日本が十二年以降の沖縄支配は、日米共同作戦体制確立にむけた日米安保の再編、そのもとでの朝鮮・アジア侵略反革命戦争の出撃拠点化と、それへの沖縄人民の排外主義的組織化に目的づけられてきた。「返還」攻撃の一時期を過渡としたこの攻撃は中間連合政府攻撃の沖縄への貫徹のもとで激しく再編され、いる。

ける官僚・警察・行政機構を掌握し中央集権化した日帝は、昨五・一五・一九「四日間の基地不法占拠」や喜瀬武原闘争への刑特法適用、昨年十・三一における姫百合・白銀闘争への反革命判決など侵略反革命戦争のためには、米軍と自衛隊の銃剣を背後にブルジョア民主主義の枠に本質上とらわれることのない攻撃をうちおろし、人民の憤激をファシズムの準備へとうち倒さんとする新たな攻撃の質を鮮明にした。

総闘争の前進を破壊し、中間連合政府の下に統合することである。米軍政に対する巨大な沖縄人民の憤激をしめした復帰協運動は、七年「返還」を前にして、闘いの次の前進をめぐる階級的分解を開始し、沖縄プロレタリア人民は、現代過渡期世界における國際主義の根本任務を自らのものとし、日帝足下における革命闘争の勝利の大道にふみだす新たな課題に直面した。これをたたきつぶし日帝の中心的延命方向のもとにうち倒すこと、これが日帝の死活をかけた生命線となつたのである。

T.S.交付金のばらまきなど、沖縄社会の全体的改造と結びついたこの攻撃は、侵略反革命前線基地強化と日帝の沖縄支配を自己の利益と考える日帝への寄生部分を育成してきた。（総額七九三億円にのぼる防衛予算沖縄関係分の半分以上がこのために使われ、これらの基地収入が所得に占める割合は、北谷村ですでに35%にのぼっている）

そして、日帝はかつての復帰協運動の指導部（社共・社大党）を社帝として育成し、沖繩人民の鬭いを内部から腐敗・歪曲せんと

した。中間連合政府攻撃の全面化の下で、彼らは本年七月二七日、県議会において満場一致で基地整備資金の導入・利用を決定し、また「平和で豊かな沖縄県作り」を掲げて、沖縄振興開発計画・C.T.S建設を推進し、「帝國主義主要路線擁護・資本主義救済」という彼らの路線的本性をあらわにした。彼ら社帝の沖縄階級闘争に占める反革命的役割はこれにとどまらない。彼らは「返還」を通じた沖縄の侵略反革命前線基地強化の現実のもとでの復帰運動以降の闘いの方向を「沖縄一本土間の格差の解消」へと反動的に収約せんとした。そして「平和憲法と資本主義の沖縄ににおける健全な発展を実現する連合政府の樹立」によって沖縄の現実は変革されると改良政府の幻惑をふりまいていた。それは、復帰協運動分解以降の沖縄階級闘争の分解を日帝ブルジョアジーとの歴史的大妥協のもとにたきつぶし、侵略反革命戦争とファシズムの血の海へと沖縄人民を沈める道にほかならない。この帝・社帝の中間連合政府攻撃と対決した、いまにいたる沖縄階級闘争の成熟をいかにして「ファシズムの準備か、武装蜂起の準備か」という帝国主義足下プロレタリアート人民の歴史的任務の下へと領導するのか、まさに今日の根本的課題が存在しているのだ。

沖繩階級闘争の前進と 新たな局面

七二年沖繩「返還」から六年、沖繩階級闘争は、帝・社帝と真正面から格闘する新たな成熟をその手にしつつある。復帰協運動の中的指導部の社帝・右翼日和見主義への育成と統合に抗して、切り拓かれた分解と流動の一時代こそ、現代過渡期世界におけるプロレタリアートの国際主義的任務の一貫した担い手として、沖繩プロレタリア人民を登場せしめるのか否かをかけた帝国主義ブルジョアジーとの激しい鬭いの時期に他ならなかつた。琉球処分以来、百年に及ぶ沖繩支配、戦後以降沖繩人民を蹂りんした米軍政支配、今日の日米帝の沖繩支配。沖繩プロレタリア人民に深く焼きつけられた、この歴史的な沖繩支配に対する憎悪こそ、一切のみせかけの『平和と改良』の幻想をうち碎く、沖繩プロレタリア被抑圧人民の武器へと発展する可能性を秘めたものに他ならない。沖繩の先進的プロレタリア人民は、これをプロレタリア国際主義の大道へとひきいれる成熟を自らのものとしつつある。

沖繩の革命的プロレタリアートは、今こそ
「日帝の侵略反革命を内戦に転化せよ！」を
かけ、沖繩階級闘争を、國際主義に武装さ
れた日帝心臓部における、計画された「プロ
レタリア武装蜂起」—プロレタリア独裁の実
現へと領導すべく、断固たる闘いを開始しな

沖縄人民を、『資本主義救済・帝国主義主導路線擁護』の道へと引きこまんとする帝・社帝と、日米帝の侵略反革命との全面的対決へと領導せんとする革命的プロレタリアートとの、激しい闘いは、復帰運動の分解以来の沖縄階級闘争の新たな段階を背景にして、くり広げられてきた。

闘いは、「返還」攻撃の進行と中間連合政府攻撃の到来の下で、現代過渡期世界における権力問題をめぐる路線闘争を担い抜く革命的プロレタリアートを生み出すことなく、次の前進を切り拓く得ないことを鮮明にしている。第一に、帝国主義の死活をかけて、引き続く日帝の侵略反革命前線基地強化攻撃との対決を、いかなる国際主義の総路線の下に切り拓くのかである。

第二に、米軍政にかわって、沖縄支配の直接的扱い手として登場した、日本帝国主義を打倒し、いかなる権力を樹立するのかである。

第三に、日帝ブルジョワジーの超過利潤の分け前をめぐる「同権の獲得」に闘いを収束せしめ、「資本主義救済、帝国主義主要路線擁護」の下に、沖縄プロレタリア人民を、日帝の朝鮮侵略反革命（戦争）とファシズムの動員の攻撃に合流せんとする社帝潮流との、いかなる路線的分岐を切り拓くのかである。

一方で、米軍・自衛隊の銃剣を背後にしても、他方で、超過利潤の一部をバラまいて、沖縄階級闘争を鎮静化せんとする攻撃が進行している。米軍支配との闘いの中で培われてきた経験と伝統を解体し、変質させる最終的攻撃が、中間連合政府攻撃の下で、完成化されんとしている。

六〇年代における、米軍政との闘いを、「異民族支配との闘い—帰属問題」へと一面化した沖縄人民党・社会党・社大党は、今日において、社帝潮流へと育成され、日帝の侵略反革命の合流者として、自らを完成させたのである。

「もはや保守と革新の区別がつかない」と沖縄プロレタリア人民にいわさしめるに至った社共の反革命純化の一方で、憤激と反抗を深める沖縄プロレタリア人民の隊列内部から日帝の中間連合政府攻撃を補完する部分が登場している。これらの部分と闘争する事なくして、沖縄階級闘争は、帝・社帝との全面対決を切り拓くことができない。

すでに六〇年代後半、右翼日和見主義としての最悪の反革命純化をとげた革マルをはじめとして、七二年「返還」時にまつたくの政策阻止闘争主義的反対派であった「返還粉碎」派、復帰運動最左派の位置を占めた「奪還」派、これらは、今日の沖縄階級闘争の新局面の中でも、その路線的本性をますます露わにしている。「復帰協運動が民族的闘いであつたが故に、ブルジョア民族主義」とする革マルは、社帝と同様に、復帰運動から米軍政との闘いを抜き去り、帝国主義の侵略反革命との対決を真向うから否定する。その上に主張する反戦反基地闘争は、自國帝国主義打倒を自らの国際主義的任務とする革命的プロレタリアに敵対する、小ブル平和主義以外の何ものでもない。ブルジョア国家権力と帝国主義に手をかけない事を宣誓する彼らは、今日

においては、労働組合運動をプロレタリア運動と主張し、ブルジョアジーの超過利潤に群がる組合主義を露わにしている。それは七二年「返還」以降の日帝の沖縄支配をプロレタリア人民の目からおおいからし、社共になりかわって沖縄プロレタリア人民を改良主義・右翼経済主義へと引きずりこむものである。右翼日和見主義は、七二年前後の「返還粉碎」にしろ、七五年前後の「沖縄自決」にしろ、現在の「安保粉碎—沖縄解放」にしろ、時々の自然発生性に応じて色あいを変えつゝも、その本質は一貫している。それは、一方における日帝の沖縄支配に対する政策主義的反対派であり、他方におけるブルジョア民族主義への屈服である。すでに開始された沖縄階級分解をおしとどめ、先進帝国主義意識部におけるファシズムの準備期をめぐる国際階級闘争の激動へと、沖縄プロレタリア人民を大胆に登場せしめることに、真向うから敵対するものである。「自決」「自主解放」「独立」と言う彼等の沖縄路線の底流は、レーニン主義とは似ても似つかぬ「大和（日帝）と訣別した平和と改良の政府」を実現する事に行きつくものに他ならない。このように、沖縄解放を日帝打倒と社会主義革命から切り離し、沖縄—「本土」プロレタリア人民の団結を改良政府実現のための「本土」プロレタリア人民の認識と「支援・援助関係」へと解消されるのである。

これら組合主義・経済主義の拾頭に対し急進民主主義は、日帝の沖縄支配との対決を「朝鮮侵略戦争」との関係で明らかにせんとしながらも、一国主義ゆえの根本的矛盾を露呈している。彼らの「奪還」論は、七二年「返還」と復帰協運動の分解の中で歴史的破算をとげ、沖縄プロレタリア人民の桎梏としての姿を露わにした。日帝の朝鮮侵略反革命との対決を、自らの解放をかけたいかなる権力を国際階級闘争の中に打ちたてるべく切り拓くのか。沖縄プロレタリア人民の前に示されたこの実践的課題を、一国主義・暴動革命路線にとかしこみ、日帝への政策的反対派の大連合の一翼へと収束させるものに他ならない。それはこの内部に忍びこむ、改良主義・経済主義と根本的に闘えないものであり、日帝の中間連合政府の「左」翼補完物へと、ますます転落していくかざるを得ないのである。

かかる中間連合政府の「左」右の補完物への育成攻撃を断固として打ち破り、沖縄階級闘争のただ中に、日帝心臓部における「プロレタリア武装蜂起—プロレタリア独裁」の実現へとむかう革命的大道を切り拓かなければならぬ。それは今日の沖縄—「本土」における革命的プロレタリアートの真正面の課題に他ならない。この実現のために「帝国主義の強制的な統合と一体化に断固として反対し」「一切の民族的抑圧に對する闘争の首尾一貫した領導」を担い抜かなければならない。そ

れはブルジョアジーによってプロレタリア人民内部に形成された「抑圧民族と被抑圧民族の歴史的疎隔を克服し」、その階級的連帯性を守り抜き、ともに日本帝国主義を打倒し世界党—世界プロレタリア独裁を闘い取る戦場へと進撃せんがためである。

日々激化する、日帝の朝鮮侵略反革命戦争稼動の攻撃と総対決し、勝利の大道とともに闘い取ろう！

日帝の朝鮮侵略反革命戦争へと進撃せんがためである。

七二年「返還」から今日にいたる一時期を領導し、沖縄階級闘争の新たな局面を告げ知らせる歴史的任務を果したのが、沖縄解放同盟の闘いであった。七五年沖縄—本土共闘を結成し、七・一七闘争を頂点にした海洋博決戦—皇太子沖縄上陸阻止闘争を領導した、この沖解同建設の闘いの歴史的意義を鮮明にすることなく、沖縄階級闘争の前進の土台をうちかためることはできない。

沖解同が本土の革命的プロレタリアートと固く結合し、きりひらい沖縄—本土共闘の地平は、次のものであつた。

第一に、日帝の侵略（反革命）戦争との対決で沖縄解放闘争の基軸にすえたことである。人民党・社会党・社大党が、「返還」攻撃下で反革命純化をとげいく中で、沖縄解放の原点を、沖縄戦に至る沖縄人民の帝国主義戦争への屈服の総括に定めた沖解同は、その闘いを日帝の侵略（反革命）との対決へと発展させた。第二に、この日帝の侵略（反革命）戦争との対決を、沖縄—本土プロレタリア人民の単一の国際主義的任務として定めたことである。「沖縄解放闘争の世界革命への直結性・直線性」という戦略主義的弱点をはらみながらも、「自決派」に代表される、日帝の沖縄支配に対する改良主義的任務として定めた沖解同は、のみならずこの共闘組織の中軸に、日帝の沖縄支配と対決する「單一の沖解同」という戦闘的沖縄プロレタリアート人民の大衆的政治的結集組織の建設をかちとり、日帝足下における沖縄—本土プロレタリア人民の闘争の、革命的統一の出発点を形成した。第三に、のみならずこの共闘組織としての沖解同に求めた。それは、日帝の侵略反革命と対決する沖縄—本土プロレタリアート人民の意識の抽出（沖縄人意識の抽出）の基軸を「反基地・反大和・反天皇」としてつかみだし、その発展方向を「安保粉碎—日帝打倒—沖縄解放」としてさし示し、その結集形態を大衆政治組織としての沖解同に求めた。それは、日帝の侵略組織化を、対立することなく領導する萌芽であった。第四にこれらにもとづく排外主義育成攻撃との闘争の要を、天皇制攻撃との

対決として設定したことである。

これらを軸にしてたたかいとられた七・一七闘争は、帝・社帝を震撼せしめ、すべての沖縄人民のなかに巨大な共感と支持を生みだすとともに、日本帝国主義打倒をみずからの一級的分解のなかにうちたてられた、激しい路線闘争のただなかに投げられたこの闘いは、不可避にその発展をめぐる次の課題に直面せざるをえなかつた。それは、日本帝国主義を打倒し、国際主義的任務を実現するためには、いかなる権力を樹立するのかである。「権力問題の解明としての日米軍事基地の暴力的撤去」という、七五年当時の沖解同の急進民主主義的立場の残存はこの領導たりえない。また逆に、ブルジョアジーによって形成された沖縄一本土の人民のあいだに横たわる「歴史的疎隔」にのみ一面的に目を奪われるものは、権力問題を永遠のかなたにおいやってしまふのである。海洋博決戦を勝利的にないきるや、新たな発展をめぐる時期が到来し、政策阻止闘争を媒介に形成された沖縄一本土共闘は、その一時期の任務を一旦おえた。

レタリア人民のたたかいは、帝・社帝との激しい攻防をへて、先進的プロレタリア人民の隊伍を創出しながらも、いまだ分散的状況に混迷している。いまこそ、この三年有余のたたかいをもって、帝・社帝の中間連合政府と分岐した革命的大道のもとに、沖縄プロレタリア人民を集結させるべき局面が到来している。沖解同建設初期における、一方での中核派「奪還論」への「大ヤマト民族主義」という批判、他方での右翼日和見主義「自決論」への「沖縄一本土階級闘争の分断の固定化」という批判の立場は、今日においては、権力問題をめぐる路線闘争として発展させられなければならない。すなわち、七二年を切斷面とする諸政治潮流の色わけと、それへの運動面に重点をおいた批判的立場にとどまることは、もはやできないということである。それらへの批判は、いかなる組織をもって沖縄と本土のプロレタリア人民を団結させるのか？ 日米帝の沖縄支配をいかに打倒し、だれともにどのような権力をうちたてるのか？そして鮮明にされなければならない。その核心は革命的前衛党にみずからを組織してゆくべき先進的指導的部分の飛躍にある。三年有余のたたかいがひきすりだした「沖縄解放闘争における基地闘争のもつ決定的役割」にせよ、「解放の主体としてのプロレタリアートと農民の共闘」にせよ、「沖縄解放における『民族問題』を共産主義の立場からとらえかえす」として論争されてきた問題にせよ、すべてこれらの路線と組織とに媒介されることによってはじめて、社共をはじめとする社帝・右翼日和見主義にたいする首尾一貫した武器

の批判たりうるのである。そのことによつて沖解同の政治的平地たる「安保粉碎・日帝打倒・沖縄解放」のスローガンは、右翼日和見主義・急進民主主義者から分岐され、国際主義に武装された武装蜂起・プロ独の大道のもとに実現されうるのである。

現在、沖解同は昨十・三一第一審判決を頂点とした日帝の沖解同破壊攻撃をはねのけ、本年九月十八日の知念同志出獄を最後に、姫百合・白銀闘争四戦士の全員奪還をかちとつた。そして、四戦士の獄中闘争とかたく結合し、沖縄、関西、関東で先進的労働者・文化人の結集のもと組織されてきた「七・一七闘争を支持する会」も、前進のうちに新たな発展段階をむかえるにいたつている。これらのすべての勝利と成果を、沖解同建設の前進にむけた新たたたかいへと結実させなければならぬ。全国のたたかう革命的プロレタリアートはともに団結し、沖解同のたたかいの歴史的成果をさらに前方におしすすめるべく総力をつくそうではないか。

沖縄解放闘争の飛躍 かけて決起せよ！

今秋期における沖縄闘争の組織化の任務はきわめて重大である。われわれは次の任務をかかげてたたかいねかねばならない。

第一の任務は 日帝の朝鮮侵略反革命とまつこうから対決する安保＝沖縄闘争の大爆発をかちとることである。帝国主義の危機の深まりと国際階級闘争の前進のなかで、日米安保の再編強化にもとづく日帝の侵略反革命戦争遂行体制強化が、すさまじい勢いで進行している。米帝リカーター在韓米地上軍撤兵計画を機として、朝鮮半島をみすえた集中的攻撃的基地機能の再編が進行し、これと結合して日米共同作戦体制が着々と強化されている。昨年来の防衛論争の排外主義的組織化は、本年に入つて栗栖発言を突破口に、有事立法制定攻撃へと一気にのぼりつめ、他方で元号法制定などの超反動立法制定攻撃が開始されている。かかる日米帝の攻撃にたいし、安保・有事立法粉碎、沖縄侵略反革命前線基地解体のスローガンをかかげ、安保・沖縄闘争の大爆発を実現し、侵略反革命を内戦に転化する革命的隊伍を創出しなければならない。

第二の任務は、かかる日本プロレタリアートの国際主義的任務のもとに、沖縄階級闘争を領導することである。それは中間連合政府とその合流者との激しいたたかいであり、同時にその背後で進行する「ファシズムの道か武装蜂起の道か」をめぐるたたかいに、沖縄プロレタリアートの革命的團結をうちかため、沖縄解放闘争の飛躍的前進、安保＝沖縄闘争の全人民的高揚を実現しようではないか。反帝戦線（全国委）沖縄地方委を先頭に、急展開する日帝の朝鮮侵略反革命と対決し、断固たる決起をともに開始しよう。

を、ますます激化させている。実弾射撃演習、砲撃演習へのうちづく反基地闘争、組織破壊攻撃をはねのけてたたかう反戦地主、軍事燃料基地＝CTS建設に抗した金武湾を守る会のたたかい、全軍労八五一一名大量解雇へと実現されうるのである。

沖解同の政治的平地たる「安保粉碎・日帝打倒・沖縄解放」のスローガンは、右翼日和見主義・急進民主主義者から分岐され、国際主義に武装された武装蜂起・プロ独の大道のもとに実現されうるのである。

現在、沖解同は昨十・三一第一審判決を頂点とした日帝の沖解同破壊攻撃をはねのけ、本年九月十八日の知念同志出獄を最後に、姫百合・白銀闘争四戦士の全員奪還をかちとつた。そして、四戦士の獄中闘争とかたく結合し、沖縄、関西、関東で先進的労働者・文化人の結集のもと組織されてきた「七・一七闘争を支持する会」も、前進のうちに新たな発展段階をむかえるにいたつている。これらのすべての勝利と成果を、沖解同建設の前進にむけた新たたたかいへと結実させなければならぬ。全国のたたかう革命的プロレタリアートはともに団結し、沖解同のたたかいの歴史的成果をさらに前方におしすすめるべく総力をつくそうではないか。

第三の任務は、これらを実現するために復帰運動の分解以降の、沖縄階級闘争の歴史的経験を、中央集権非合法党建設へと結実させることである。政治的分歧は組織的分歧として決着づけられねばならない。そしてまた階級闘争の歴史的経験は、党によつてのみ眞に革命にむかって総括され蓄積されていくことができる。このレーニンの精神は、現代過渡期世界の共産主義者にとって、ますます緊要な任務となつてゐる。これなしに帝国主義を打倒し、世界革命・世界プロ独にむけた階級闘争の領導を実現することはできない。

全国のたたかう労働者・人民諸君！

十一月、迫りくるCTS決戦の大爆発のなかで、知念同志奪還勝利・沖縄解放集会（仮称）を全国でたたかいとり、沖縄・本土プロレタリアートの革命的團結をうちかため、沖縄解放闘争の飛躍的前進、安保＝沖縄闘争の全人民的高揚を実現しようではないか。反帝戦線（全国委）沖縄地方委を先頭に、急展開する日帝の朝鮮侵略反革命と対決し、断固たる決起をともに開始しよう。